

# 意味のない言葉だけは、 口にすまい



## 東日本大震災取材日記②

ノンフィクションライター 山川 徹

被災から1週間——東北の厳しい寒空の下に、揺れと津波に家族を引き裂かれた何万、何百万もの人々の現実があった。東京から被災地へ向かった山川さんの山形の実家には、被災した出版社「荒蝦夷」の人々が避難していた。

### 何か、は起きた

三月十八日(金)

被災八日目。午前八時。ぼくは実家の客間に六人分の朝食を持っていった。引き戸の先から鳴咽おえうがもれていた。高校を卒業するまでをのんきに過ごした山形県上山市の実家で、まさかこんな体験をするとは想像もしていなかった。

東京から被災地に向かったぼくが、仙台市の出版社「荒蝦夷あらいま」の代表取締役・土方正志さんから六人と合流してから四日が過ぎた。土方さんらは山形で態勢を立て直して早期の事業再開をはかるべく、余震が続く仙台からぼくの実家に一時、避難してきていたのだ。

塩竈市の障害者福祉施設で働く須藤文音さんと仙台市の障害者施設職

【写真】瓦礫の街に菊の花束が捧げられていた（3月28日・気仙沼市）

員の高城啓さんも、「荒蝦夷」と行動をともにしていた。ふたりとも気仙沼市出身の二三歳。

ぼくが須藤さんとはじめて会ったのは六年も前になる。気仙沼高校を卒業した須藤さんは仙台の専門学校に進学して「荒蝦夷」でアルバイトをはじめた。就職したいまも時々、「荒蝦夷」を手伝っている。いつか須藤さんはこんな話をしていた。「私、生まれてはじめてブラックコーヒーを飲んだのって、『荒蝦夷』の事務所なんです」

いつしか「荒蝦夷」と須藤家の家族ぐるみにつき合いがはじまった。気仙沼で取材があれば、決まって須藤家を訪ねるようになっていた。

ぼくも須藤さんの父の勉さんと仙台で酒を呑んだ経験がある。あれはもう三年も前か。船の自動操舵システムのエンジニアである勉さんは、

笑いながらぼくにこういった。「お前みたいないい加減な酒呑みは、気仙沼に来たら漁師にぶん殴られるか、気に入られるかふたつにひとつだな。いつでも気仙沼に遊びに来い。旨い魚を食わせてやるから」

勉さんは娘に常々、こう語っていたという。「仙台で何かあったら『荒蝦夷』の土方さんたちを頼りなさい。仙台のお父さんだと思いなさい」

何か、は起きた。須藤さんは高校、専門学校の同級生で交際している高城さんのアパートで被災した。直後、気仙沼市の実家と電話が繋がった。母と祖父母、帰省中だった大学生の妹が一緒だった。勉さんは仕事でどこに居るか分からないという。

が、それ以来、実家との連絡も途絶えた。何度、電話をかけても家族

の声は聞けなかった。彼女の実家は川筋にある。津波は川を遡って山間の集落までも押し流していた。「もしものことは覚悟しています」

もしも家族みんなが——。彼女は最悪の現実を受け止める準備をしていた。ぼくは、彼女が語る言葉を現実味を持たずに聞いていた。「まさか、そんなことには……」。東京の自宅アパートも山形の実家も家族も無事だったぼくは、まだどこかで根拠のない救いを信じていた。

そして、この朝。八日ぶりに気仙沼と連絡が繋がったのだ。

高城さんは家と四歳の姪ひな子こが流されてしまったと話した。須藤さんは実家にいた母、祖父母、妹は無事だったが、未だに勉さんの行方が分かっていないといった。

「お母さん、暖かいところに居るの？ ちゃんと、ご飯、食べてるの？」